

令和7年度（2025年度） 第2回東海市不登校対策協議会 会議録

- 1 日 時 令和7年（2025年）10月8日（水）
午後2時から午後3時
- 2 場 所 市役所603会議室
- 3 出席者 社会福祉協議会事務局次長兼総務課長 宝達 真志
主任児童委員 田中 博美
東海市立緑陽小学校長 廣田 雅明
東海市立加木屋中学校長 富田 高生
東海市立明倫小学校主任養護教諭 富田 優子
東海市立加木屋中学校生徒指導主事 住田 恵太
幼児保育課 指導保育士 川口 満子
こども課主任 木村 智明
健康推進課 主任指導保健師 大串 文子
- 4 傍聴者 なし
- 5 事務局参加者
東海市教育委員会 教育長 鈴木 俊二
教育部長 小島 久和
学校教育課長 桜井 正志
学校教育課 主任指導主事 越智 真剛
〃 指導主事 池田森太郎
〃 指導主事 高橋 民子
〃 統括主任 本多 佑鷹
〃 教育相談員 坂口 栄子
教育支援センター「ほっと東海」
教育相談員 早川 悦子
教育相談員 武田 基二
教育相談員 深谷 公子
教育相談員 田島 一朗
スクールソーシャルワーカー 飯田 彩花
スクールソーシャルワーカー 西 実莉
スクールソーシャルワーカー 甲斐茉莉奈美
- 6 会 議
 - (1) 教育長あいさつ
 - (2) 会長あいさつ
 - (3) 協 議

ア 子どもの自立と未来を語る会及び青空教室について

(指導主事より資料に基づいて報告)

「子どもの自立と未来を語る会」の結果

- 不登校傾向の児童生徒とその保護者、関わる教職員等を対象に、東海市小中学校校長会研究部の進路指導部が、令和7年7月26日(土)に東海市勤労センターで開催した。中学卒業後の進路先だけでなく、自立のための道筋について具体的に見つめたり考えたりすることを趣旨としている。
- 参加者は91名で、東海市の生徒・保護者・教職員、他市町から参加した保護者等であった。昨年度に引き続き、不登校傾向の生徒が多く通う学校の情報が1冊にまとまった資料を配付した。
- 「ほっと東海」に通級した高校生や専門学生、子供が不登校を経験した保護者、東海市スクールカウンセラー、東海市社会福祉協議会職員をパネラーとしたパネルディスカッションを行った。その後、進路指導主事からQ&Aを交えて不登校傾向の生徒の進路状況等について説明した。また、会場に学校ごとのブースを設け、保護者や生徒がパネラーや各校の進路指導主事と懇談することができた。
- 不安や悩みを抱えている参加者にとって、同じような経験をもつ方の話を聞いて、思いを共有したり励みになったりする機会を作るためにも、本年度のようにパネルディスカッションの時間を十分に確保することや入試制度や中学卒業後の進学先の学校に関してより分かりやすく情報提供することができるようにする。

「青空教室」の結果

- 不登校傾向にある児童生徒が、若狭湾の雄大な自然と触れ合うことでエネルギーを蓄え、参加者相互の交流を図り、新しい一步を踏み出すことを目的に、国立若狭湾青少年自然の家で、2泊3日の日程で行った。
- 当日の参加者は小学生8名、中学生12名の計20名であった。大学生ボランティアは、星城大学7名と日本福祉大学8名が参加した。事前に行った交流会を通して親しくなった参加児童生徒の様子を踏まえ、お兄さんお姉さんの立場で3日間一人一人に寄り添ってサポートし、「チャレンジしよう」とする気持ちを後押しした。
- 2日目の9月14日(日)は、朝から雨が降っていたため、山の散策を中止し、施設内でスルーリングラリーを行った。午後には、天候が回復したため、海の活動を行うことができた。
- 活動を通して、それぞれの児童生徒が自信をつけるとともに、エネルギーを蓄えることができた。

- 今年度より、国立若狭湾青少年自然の家のスタッフのサポートがなくなったため、児童生徒の安全を第一に考慮し、海の活動の種類や場所を精選して実施した。
- 大学生ボランティアを確保していくために、星城大学、日本福祉大学、大同大学の他に、至学館大学にも募集を行った。

イ 不登校傾向児童生徒の状況について（非公開）

ウ スクールソーシャルワーカーの活動の状況について（非公開）

エ スクールカウンセラーの活動の状況について（非公開）

オ 教育支援センター教室「ほっと東海」の状況について

（教育相談員より資料と事例に基づいて報告）

- 昨年度の入級した児童生徒は、横須賀教室で48名、上野公民館教室で21名、平洲中学校教室で12名、合計81名である。
- 入級の状況は、教室の広さや交通機関等の便利さもあり、横須賀教室の入級が多い傾向である。平洲中学校教室は、通いやすさの面からか平洲小学校および平洲中学校の児童生徒の入級がほとんどである。
- 教育相談員、教科指導員等が児童生徒と会話をしたり、レクリエーションをしたりして、安心・信頼の関係づくりを心掛け、学習は個別指導を基本としている。
- 中学3年生の生徒に対しては、進路を見据えた過去の試験問題などに取り組みせたり、面接指導や作文指導などを支援したりしている。
- 校外学習等の行事は、なるべく同じ日に設定し、3教室の交流を図っている。今年度から、行事に参加せずに学習がしたいという児童生徒のため、スタッフの一人は教室に残り、行事に参加しない児童生徒の支援ができるような体制に変更した。
- 不登校に対する手立てとして、学校とのよりよい連携のあり方について、学校のニーズを把握しながら連携方法を検討していきたいと考える。

オ 主な意見

- 親子の関係を幼少期から作っていくことが発達ステップの中で大切である。
- 人は本来、人によって癒やされるものである。だからこそ、子どもは遊びを通じて、自分の存在価値を知り、人とコミュニケーションを図っていけるようになると考える。
- 不登校の要因は多岐多様であり、学校では対応が難しいケースが増えてき

ている。その一方で、スクールソーシャルワーカーが介入したことで、生徒本人や保護者の変容が見られ、登校ができるようになったり、進路を考えることができるようになったりしたケースがある。学校現場においてスクールソーシャルワーカーの存在は欠かせないものになっている。

- 学校は、家庭的な問題を抱えている不登校児童生徒への対応や支援をスクールソーシャルワーカーや関係機関と連携して取り組んでいきたいと考える。
- スクールソーシャルワーカーが介入したことにより不登校が改善したケースも含め、不登校児童生徒の対応や支援の在り方を分析し、家庭のニーズに合わせた支援に努めていく必要があると考える。
- 家庭環境の問題は、地域福祉の力を借りることが家庭への支援に繋がりやすいと考える。
- 不登校の問題は、教育委員会や学校だけが抱える問題ではなく、福祉や保健などの関係機関も向き合っていかなければならない問題であると考え。
- スクールソーシャルワーカーが校内を巡回して児童の様子を把握したり、一緒に遊んだりして関わりをもってくれている。心配な児童や家庭については、事前にスクールソーシャルワーカーに情報共有するなどして、不登校になる前に、児童との関係づくりに努めておくことが大切であると考え。
- スクールソーシャルワーカーの拠点校ではない学校は、スクールソーシャルワーカーの支援体制が整わないことが考えられるため、問題を抱える児童生徒やその家庭への支援が十分にできないのではないかと考える。
- 不登校の児童生徒の居場所づくりや学習の機会を整えることも大切だが、不登校の予防的な対策として、不登校にならない学校づくりを第一に考える必要があると感じている。
- 児童生徒が学校に行きたいと思える学校であれば、不登校は問題にならないのではないかと考える。そのために、主任児童委員として、学校に協力できることをしていきたい。
- 育児は大変なことも多いが、父親や母親が子育てに「今」向き合うことが大切であることを伝えていきたいと考える。